令和6年度第2回 奥出雲町地域ケア多職種連携会議

奥出雲病院在宅診療センターは、奥出雲町から在宅医療介護連携推進事業を受託し、「在宅医療・介護連携支援センター」としても活動をしています。その一環として、「奥出雲町地域ケア多職種連携会議」を年4回開催しています。この会議は、町内の医療、介護、福祉、行政に関わる関係者が一堂に会し、高齢の患者や利用者にまつわる課題とその解決策について、職種の垣根を越えて協議する場となっています。

今回は、「奥出雲町の看取り」をテーマに、人生の最期をどのように迎えるかについて、日頃の事例や職種ごとの考え方を共有し、より良いケアについて議論しました。

医療や介護の専門家である私たちが果たすべき役割は、ご本人やご家族の思いを丁寧に聞き取り、それを大切にするために、『経験に基づいた様々な選択肢を提示し、安心して最期を迎えられるよう支援することが重要である』との意見が出されました。

この会議は島根県においても先進的な取り組みとして評価されており、今回は邑南町の保健師の方々にもご参加いただきました。

今後も、奥出雲町ならではの地域ケアに関する課題を取り上げ、関係職種が一丸となって、町民が安心して暮らせるよう支援していきます。

令和6年度病院運営中間報告会

令和4年度より毎年開催している「令和6年度病院運営中間報告会」を開催しました。

直近の病院経営状況と後半期および次年度に向けた病院運営方針について、鈴木院長と経営課より説明を行い、参加した職員間で共有しました。

新型コロナウイルス感染症の法律上の取り扱い変更や令和6年度の診療報酬改定を受けて以降、病院の経営は大きな転換を迫られています。

この会では、現在の課題とそれに対する対策について活発な意見交換を行い、意思統一を図りました。

今後もよりよい医療と介護サービスの提供を通じて、町民の皆様に安心を提供できるよう職員一同努力して参ります。

そうだったのか！ がん専門医による抗がん剤のお話

第9回

内科 診療部長 池尻文良（いけじりふみよし）

【免疫チェックポイント阻害薬の副作用】

前回は免疫チェックポイント阻害薬の効果についてお話をしました。今回はその副作用について説明します。吐き気や抜け毛、ひどい倦怠感（けんたいかん）、免疫力が低下し感染症を起こすなど、皆さんがイメージされる抗がん剤の副作用はほとんど出ません。ガラッとかわった副作用が出ます。というのも、免疫チェックポイント阻害薬は免疫細胞を活性化させ、がん細胞をやっつける治療法です。免疫細胞が、がん細胞だけを攻撃してくれればよいのですが、勢い余って自分自身の正常な細胞も攻撃してしまうことがあるのです。

比較的多い副作用は間質性肺炎です。免疫細胞が肺の正常細胞を攻撃するために肺炎が起こります。同じような理屈で、甲状腺組織を攻撃すると甲状腺炎が起こり、腸の細胞を攻撃すれば腸炎による下痢を起こします。比較的珍しいのですが、すい臓のインスリンを作る細胞を攻撃してしまい、１型糖尿病という糖尿病を引き起こすこともあります。ほかにもさまざまな臓器で免疫細胞が自分の正常細胞を攻撃することがあります。

このように免疫チェックポイント阻害薬も完璧な薬ではなく、いままで抗がん剤治療を行ってきた医者もあまり経験しないような副作用が出現します。このような多彩な副作用に対応するうえでも、抗がん剤のスペシャリストである『がん薬物療法専門医』のニーズは非常に高まっています。抗がん剤を扱う医者は当然このような副作用にも精通しているからです。

実はこの『がん薬物療法専門医』は2024年10月現在、島根県にたった15名しか存在しないのですが、そのうちのなんと**2名！**が奥出雲病院に在籍しているのです。私と鈴木院長です。鈴木先生はもともと外科の先生ですが、大変な努力をしてこの資格を取得しておられます。（島根県の15名のうち14名は内科の先生で外科の先生は鈴木先生おひとりなのです！外科の先生が取得するのはとても大変な資格です）

奥出雲病院は都市部の大きな病院に引けを取らないような抗がん剤診療が可能な病院なのです。お困りのことがあれば是非、当院に相談してくださいね！